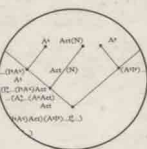


テキストとしての小説



ジュリア・クリステヴァ 著

谷口勇 訳



▼テキストとしての小説への記号学的アプローチにおいて、筆者は変換的方法を用いることにするが、しかし、これは生成言語学から着想を得ているにせよ、それだけに限られて

いるわけではない。

▼言うなれば、小説の原理も、小説を特徴づけているこの変換の具体的な諸形式とともに、筆者が指摘し分析してきたようなテキスト相互関連の空間のなかで、小説によって汲みとられ……この空間によって変更をこうむるという関係に置かれて



▼宮廷風恋愛の考え方では、性行為は心と心の融合の過程で輪郭がぼやけている。したがって、人が憧れるのは同一化であり、三位一体の総合によって代表される

種の精神的男女両性具備なのである。

▼我々が出合うのも、他者（女性）の動きの過程なのである。言うなれば、両面価値性の種子が出現したのであり、これとともに小説が誕生したことになる。小説の出生地は女性なのである。もっと正確に言えば、女性の（スコラ学的な）諸と否ということ、したがって、自己および／または他者、擬似 - 他者であるという女性の非 - 離接的機能が、小説の母胎なのである。



訳者略歴

谷口 勇 (たにぐち いさむ)

1936年福井県生まれ。1963年東京大学大学院西洋古典学修士課程修了。1970年京都大学大学院伊藤伊文学博士課程単位取得。1975～76年ローマ大学ロマンス語学研究所に留学。現在桃山学院大学経済学部教授。

〈訳書〉 J.トラバント『記号論の基礎原理』南江堂

H. A. スリュサレヴァ『現代言語学とソシュール理論』而立書房

A. マルケーゼ『構造主義の方法と試行』創樹社

J. グリステヴァ『ことば、この未知なるもの』国文社 (共訳)

W. カイザー『文学作品の分析と解釈』創樹社 ほか

テキストとしての小説

1985年10月30日 初版第1刷発行

著 者 ジュリア・クリステヴァ

訳 者 谷口 勇

装 幀 宮迫千鶴

発行者 前島 淑

発行所 国 文 社

東京都豊島区南池袋1-17-3 (〒171)

電話03(987)2865 振替東京8-195058

印刷 新栄堂／製本 石津製本

定価 3,500円



テキストとしての小説

ジュリア・クリステヴァ 著

谷口勇 訳

国 文 社

LE TEXTE DU ROMAN

par

JULIA KRISTEVA

Mouton Publishers, The Hague, 1970

ACKNOWLEDGEMENTS

The translator and publishers are grateful to the following for permission to translate copyright material:

"Recensione a J. Kristeva, *Le texte du roman*, The Hague-Paris, Mouton, 1970, pp. 193", by Luciano Bottoni, copyright © 1971 by Luciano Bottoni, published in *Lingua e Stile*, n. VI, 1971, pp. 509-512.

"Review on *Le Texte du roman* par Julia Kristeva, Paris: Mouton, 1970, pp. 209 and *Critique du roman* par Françoise van Rossum-Guyon, Paris: Gallimard, 1970, pp. 305", by Leon S. Roudiez, copyright © 1972 by The Romanic Review, published in *The Romanic Review*, Vol. LXIII, No. 1 (February 1972), pp. 76-80.

«Структурная поэтика сюжетосложения во Франции» by Г. К. Косиков, copyright © 1984 by Издательство «Наука», published in *Зарубежное литературоведение 70-х годов*, 1984, pp. 143-149.

The following copyright of translation has been assigned:

"Le Roman du texte: A Response to Julia Kristeva's Reading of Antoine de La Sale's *Petit Jehan de Saintrê*", by Roland A. Champagne, copyright © 1972 by The University of Wisconsin Press, published in *Sub-Stance*, II: 1 (Fall 1972), pp. 125-133.

目次

0	序論	13
0・1	テーマならびに方法論	14
0・1・1	記号学とは何か	14
0・1・1・1	テキストの概念	18
0・1・1・2	イデオロギー素としてのテキストの概念	18
0・1・1・3	〈小説の言表〉の概念	20
0・1・1・4	語りの複合体の概念	22
0・1・2	小説とは何か	23
0・1・2・1	変換としての小説の概念	27
0・2	対象の選定	30
1	象徴から記号へ	39
1・1	象徴／記号の区別	40
1・2	象徴の諸特性	42

1・2・1		42
1・2・2		45
1・2・3		48
1・2・4		51
1・3	記号の諸特性	53
1・3・1		53
1・3・2		55
1・3・3		56
2	変換的方法とその記号論的応用	59
2・1	変換的方法	60
2・1・1	変換——学問と方法	60
2・1・1・1	アメリカ言語学における変換の定義	62
2・1・1・2	変換適用モデル	63
2・2	記号論的適用	68
2・2・1	変換適用モデルと複合的記号体系	68
2・2・1・1	文学的“意味”の保存か、それとも変換か	68

2・2・1・2	閉鎖されたテキスト。小説の構造が当初からプログラミングされていること	70
2・2・1・3	閉鎖されたテキスト。恣意的なしめくりと、小説の終結	80
2・2・2	記号体系のシニフィアンとシニフィエ	89
2・3	変換の支配要素	92
2・3・1	小説の非一離接的機能	92
2・3・2	非一生産としての変換	101
2・4	共時的変換と通時的変換	107
2・5	変換のレベルおよび単位の画定	112
2・6	テキスト生産性の問題	117
3	行為項の変換	127
3・1	行為項	128
3・1・1	行為項の定義	128
3・1・2	神話モデルの破壊	132
3・1・3	言述としての行為項。行為項の境位の標識としての言表の境位	138
3・1・3・1	テキスト空間における言表	139
3・2	“言語に内在する対話”と両面価値性	141

3・2・1 バフチンの対話的言葉観への批判。小説的対話関係の定義……………141

3・2・2 両面価値性……………145

3・3 物語のなかの言表の分類……………151

3・4 小説の意味作用の組織化……………156

3・5 送り手……………159

3・5・1 言述の各境位の配置……………159

3・5・1・1 送り手の言表の層状化……………159

3・5・1・2 送り手の二重の立場——演者／作者、修辭的主体／文学的主体……………160

3・5・1・3 テクスト生産性の超代名詞的境位……………165

3・5・1・4 行為項“送り手”の諸境位を貫通する記号のイデオロギー素……………166

3・5・1・5 言表行為の主体と言表の主体とへの送り手の二重化。超越的主体……………170

3・5・1・6 語りの言表と分布的言表……………180

3・5・2 他の諸行為項の言表における成層化……………186

3・5・2・1 サントレ……………187

3・5・2・2 奥方……………194

4 語りの複合体の生成……………199

4・1	物語 ^レ を操作する諸複合体	200
4・1・1	連結子	200
4・1・1・1	連結子の両面意義性	201
4・1・1・2	述語的連結子の両面意義性	208
4・1・2	語りの同定子	211
4・1・3	接続子	215
4・2	語りの複合体の生成の一覧表	218
4・3・1	変換的分野。複合体の生成元と行為項の生成元との回帰的關係	224
4・3・2	小説の領域の諸特性	226
(要約)		229
5	テキスト間相互関連性	231
5・1	書物とスコラ学	232
5・1・1	古代から中世にかけてのエクリチュールの価値	232
5・1・2	書物のうちに潜む書物	243
5・1・3	唯名主義vs. 象徴主義	248
5・2	都会と声	254

5・3	宮廷風恋愛詩と自己崇拜	262
5・4	カーニヴァルとシニフィアン置換	271
5・4・1	カーニヴァルの位相	272
5・4・2	二重化と仮面	275
5・4・3	カーニヴァルの言述の諸文彩 ^{あや}	282
6	小説の宇宙論	297
6・1	小説の時称	298
6・2	小説の空間	307
6・2・1	小説における地理的空間	307
6・2・2	小説のテキスト空間	312
7	結論	317
7・1	小説、記号、象徴	319
7・2	変換的“記号”	323
	あとがき	326
	注	328

付録 『テキストとしての小説』に関する書評集	371
1 小説としてのテキスト——アントワース・ド・ラ・サル作『小姓ジャン・ド・サントレ』に 関するJ・クリステヴァの読み方に対しての一つの返答（ロラン・A・シャンパーニュ）	372
2 『テキストとしての小説』への書評（L・ボットーニ）	392
3 『テキストとしての小説』（J・クリステヴァ著）および『小説批評』（F・ファン・ロッス ム・ギュイヨン著）合評（L・S・ルーディエ）	399
4 フランスにおける主体形成の構造詩学——クリステヴァの場合——（Γ・K・コーシコフ）	410
訳者あとがき	420
書誌	442
索引	452

テキストとしての小説

凡例

- 1、翻訳には、Julia Kristeva: *Le texte du roman* (Mouton Publishers, 1970, 1979³) を底本とした。
- 2、Jordi Llovet にするスペイン語訳、*El texto de la novela* (Barcelona, Editorial Lumen, 1974) をも随時参照した。
- 3、原文・引用文における数多くの誤記・誤植・脱落は、訳者の調査で判明した限り訂正してある。
- 4、引用文献で邦訳のある分は、訳者名を逐一明記しないが、参照させていただいた(多少、文体を変えた箇所もある)。
- 5、訳者注は最小限必要と思われる説明的な注釈に限り、「」内に挿入した。「」は原著のままである。
- 6、原注() および補足的な長文の訳注「」は、本文末尾にまとめた。
- 7、代表的な書評四篇を付録として訳載した。

0 序 論

「彼は混合ということにのみ讃辞を送っている。」
——アリストテレス『生成消滅論』第二卷第六章（三三三B一
九）

0・1 テーマならびに方法論

以下の論究において、筆者は小説という語りの構造を記号学的に分析していくことにしたい。筆者の研究手段（記号学）も研究対象（小説）も、それぞれ別個の論点であるうえ、しかも前者は目下、探究されつつある学問であるし、後者に至っては、絶えず解体し続けてその固有法則をついに確定しえないままである。それ故、両者を交差させると、筆者のテーマが不可能になるようにも思われる。それはさておき、筆者は次の公準を出発点にしている。すなわち、上の二つの論点が歴史のなかで連結され、現代の思想構造を特徴づけることができれば、そういう連結は意外な効果を及ぼすものとして、科学的研究の領域に入ることができ、かつ入るべきであらうし、両方の論点を相互に解き明かすことにもなろう、という公準に立脚しているのである。

0・1・1 記号学とは何か

ソシュールが著書『一般言語学講義』（一九一六）において、記号に関する広範な科学——言語学はその一部分を成すにすぎないとされる——を指し示すためにこの用語「記号学」を使った〔第一段階〕以後、この用語の意義はたいそう変化した。^[1]第二段階で注目されたことだが、記号学の対象と

しての記号が何であれ（ジェスチャー、音声、イメージ、等）、それは言語を介してしか認識されないし、また、「記号学者は……遅かれ早かれ、途中でことばを対象にしなければならなくなる（ここの「ことば」とは、比喩的な意味ではなくて、「真正な」意味での言語をさす）⁽¹⁾。それも、単にモデルとしてだけではなくて、構成要素、または中継、または記号内容としてである」⁽¹⁾。記号学が取り組もうとするこれらの「ことば」は、「二次的なもの」であり、しかも、記号素〔記号表現と記号内容とを具備した言語記号の最小単位〕や音素〔言語記号を成す記号表現の最小単位〕よりも広大な単位から構成されていることを確認した後では、記号学が超言語学（trans-linguistique）として成り立つものと結論されたのだった。「要するに、やがてはソシユールの提唱をひっくり返す日がくるかもしれないことを今からも認めておかねばならない。すなわち、言語学が記号の一般的な学の一部——たとえ格別重要な一部だとしても——なのではなく、記号学が言語学の一部分なのである。もっと正確に言えば、言述の大きな意味単位を扱う部門なのである」⁽²⁾。

言語学／記号学の関係についてのこの転倒は、私見では妥当至極なことだが、しかし今度は、それが黙認したままにその同じ隙間のせいで、修正を余儀なくされている。ことばなくして記号はありえず、記号のモデルは話す言語のうちに先験的に与えられており、したがって、言語学の外に記号の科学が存在することはありえぬと結論している限りでは、哲学的にも正当と認められる。だが、この確認から、次の二つの問題が提起されることになる。すなわち、(1)現代言語学の操作モデルが、はたして言語学のみで内部で一般記号学の構築を可能にするだけの力をもつか、(2)研究対象である意味産出体系の枠内で、意味の生産——コミュニケーションの図式だけに閉じ籠った言語学では、こういう